

群 教 セ	E03 - 03
	平17.227集

国際社会に対する理解と

尊重のできる生徒の育成

— 国際理解教育におけるメディアリテラシーの指導を通して —

特別研修員 戸崎 勉 (太田市立宝泉中学校)

《研究の概要》

本研究は、国際理解教育の推進に当たり、情報の視点から構成した指導計画を考えたものである。生徒達の身の回りにある諸外国の情報について、メディア側の構成や表現の違い、報道される内容の違いを知ること、偏りのない、公正な理解をするための方法を模索した。さらに、情報に煽られる事象について考えることで、与えられた情報に対して冷静に対処する姿勢を身に付ける実践を考えた。

キーワード 【国際理解 情報モラル 総合的な学習 人権尊重教育 道徳】

I 主題設定の理由

中学校での国際理解教育は、外国語学習や地理・歴史の学習を中心に、諸外国の言語や文化に触れることや、総合的な学習の時間の一領域として異文化理解を主題に進めていることが多い。それにもまして、情報化社会が進んだ現在、テレビ・新聞などのマスメディアやインターネットを通じて入る諸外国の情報は、中学生の技能によっても大量に得ることができるようになった。本校(中学校354名)の生徒に対する調査でも、学校の授業以外に95.8%の生徒がテレビ、57.9%が新聞を諸外国の様子を知る手だてとしている。これに加え、映画・ビデオ、インターネットを情報源とする生徒も増えており、新聞やテレビのみが世界への窓口だった時代から大きく変化していることがわかる。

このような社会の中でメディアは視聴率や顧客を獲得するために、情報を加工し、より刺激的な映像や話題を提供する傾向が指摘されている。生徒が諸外国の様子を知る手だてとして、テレビニュースによるところが多いが、実際に映像として流される内容は時間の制約もあり、刺激的な場面に限られてしまう。印象に残る場面として、「スマトラ沖の津波 = 家が流されていく」、「反日デモ = 石を投げている・日の丸を燃やしている」、「自爆テロ = 爆弾が破裂」といった断片的な記憶だけが残ることとなる。記事やコメントによる詳細な説明もあるが、生徒に対する、『最

近の「他国についてのニュース」の中で印象に残っている事柄と、それを受けたメディア』の調査でも、新聞よりもテレビと答える生徒が圧倒的に多い。

このように短時間の映像による情報だけが、生徒に与えられた場合、その国に対する正しい理解や文化に対する尊重の心が育成されるとは考えにくい。

国際理解教育において、現地におもむいて自らが体験することは極めてまれであり、多くはメディアを通じての情報を元に進めることとなる。そのため、テレビに限らず新聞や書籍からの情報に対しても、生徒が正しく理解しようとする姿勢と判断していく力を育てる指導が必要になってきていると考える。

そこで本研究では、生徒たちに様々なメディアの取り上げ方をつかませ、一つの事象の多角的な見方を通しながら、情報の見方や選択の視点を身に付けさせたい。これにより、国際社会の中で諸外国の様子を多方面から理解したうえで、異文化を尊重できる姿勢を育成したいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

道徳・総合的な学習の時間を中心に、国際理解教育の構成を考える。生徒の身近にあるメディアの情報を元に、番組の内容や取り上げ方について考え、比較・検討する。また、不確定な情報が社

会や民衆に与える影響について、具体的な事例を取り上げて考える。これらの活動により、諸外国からの情報を冷静に分析・判断しようとする態度が身に付き、国際人としての資質が育つことを実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

本研究では国際理解教育に次の4つの観点を設定する。4つの観点とは①人間理解 ②文化理解 ③世界の現実理解 ④異文化間コミュニケーション力の育成 これらにかかわる教科領域としては、道徳および総合的な学習の時間、外国語、技術・家庭、社会があげられる。本研究ではこのうち、道徳と総合的な学習の時間を使い、観点の①と③を中心に研究を進める。

なお、この4観点は埼玉県さいたま市立七尾中学校が提唱した国際理解教育上の観点を参考とした。

- 1 メディアからの情報について : 情報の違い
テレビと新聞で扱われた同一のニュースや番組を基に、それぞれのメディアの特徴と内容の違いを把握することで、より多くの視点からの情報を基に判断していくことの重要性がつかめるであろう。
- 2 冷静な判断と人権 : 情報の危険性
情報に扇動される事象を基に、情報のもつ危険性について学習する。これにより、不確定な情報に対して冷静に対処しようとする姿勢をはぐくむことができるであろう。
- 3 身の回りにある情報 : 共通課題
新聞の国際欄を基に、様々な海外のニュースの見出しを取り上げることで、それらの情報には国際社会がもつ共通課題がかかわっていることを知り、世界規模での問題について考えようとする姿勢が身に付くであろう。

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 用語の説明

ア 国際理解とは
国際社会における諸外国に対する知識や望まし

い態度・姿勢を身に付けること。そのための指導を国際理解教育とする。

イ 国際理解教育とは

- ① 偏見のない公正な人格を持ち、国際社会の一員として、認識・行動できる人間を育成すること。またそのような人間を「国際人」と考える。
- ② 地球規模の視野で、人類の共通課題の解決のために参画できる人間を育成すること。この場合の共通課題には、人権問題・南北問題・環境問題などが含まれる。

* 基本的な内容・目的は1974年ユネスコ総会における決議より参考とした。

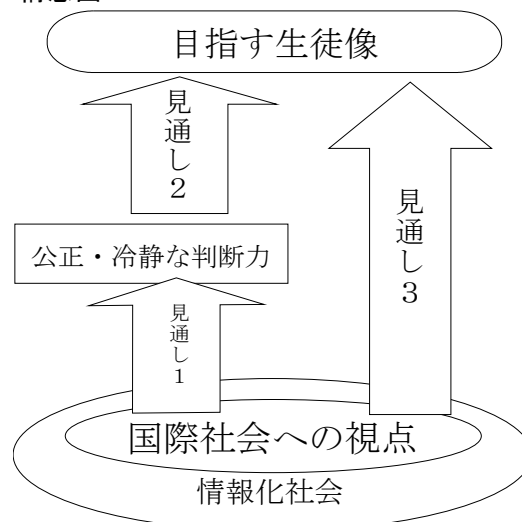
(2) 目指す生徒像

「国際社会に対する理解と尊重のできる生徒」とは

国際社会において、メディアからの情報を公正に判断・理解し、自ら知識を補完しながら自国を含め様々な国家・民族の文化や人権を尊重できる生徒、および国際社会のもつ共通課題に対し、自分なりに考えようとする生徒、としてとらえた。

生徒はこの現代においても、国際社会を外国と外国人の世界としてとらえる傾向があり、国内にいる限りでは国際社会とかかわっている感覚が弱い。現実には情報技術の発達により、他国の情報がテレビ・新聞・インターネットを通じて、流入している。特に映像による情報は説得力があり、他の国に関してもメディアから与えられた情報をそのまま受け止め、その国のイメージを固定させたりしがちである。イメージに左右されず、国と個人とを離してとらえ、どの国の国民であっても差別せず、対等の関係を築けることがこれからの国際社会において重要であると考えられる。

(3) 構想図



見通し1において、情報に対しての見方・とらえ方を養い、見通し2では具体的な人権侵害の例について考えさせる。並行して見通し3では、国際社会の問題を個々に意識させることで、目指す生徒像に迫りたい。

2 実践の概要

テレビの映像と新聞の記事・投書をもとに、国際社会のなかでの情報のとらえ方を考えさせる。本研究では、道徳と総合的な学習の時間を中心に、中学3年生を対象に学習を進める。

(1) 他国の様子を伝える映像を基に、情報の重要性和メディアによる表現の違いを理解し、異文化に対する公正な姿勢を養えたか。(見通し1)

○総合的な学習の時間 (1.5時間)

ア 実践の概要

2つのグループに別々の映像資料を視聴させ、その感想を発表させた。その違いから、映像による説得力について考えさせ、あわせて他のメディア(新聞)からの投書や社説を加えて、より冷静で公正な考え方を掴ませる。「国と国」の視点から、「個と国」「個と個」の視点を導いていった。

第1回の授業では3年3組で、2つに分けたグループに対し、同時に別種(ニュース映像とバラエティ番組)の映像資料の視聴を行った。視聴後、それぞれの感想を発表しあうことで、映像から受ける印象の違いを明らかにした。互いに視聴した映像を確認した後、「どちらの映像が真実であるか?」をテーマに話し合わせる。ニュース映像(反日デモを行う中国人の姿)とバラエティ番組(日本人との別れを惜しむ中国人家族の姿)を比べ、始めはニュース映像の方が真実であるとする意見が大勢であった。これに対して、新聞の社説と投書からの情報(①中国での情報規制②反日デモ当日上海にいた日本人観光客の視点③在日の中国人留学生の、「映像の偏り」を指摘する意見)を資料として読み取り、ニュース映像に対しても、それがすべてを表現していないことをとらえた。最後に、自分(個人)と中国(国家)、自分(個人)と中国人(国民)の距離を同心円で位置を表し、感想をまとめた。(資料1及び図1)

資料1 授業後の感想

見た映像だけで中国人のことを知っているようにいうのはいけないと思った。全員が悪い人ではないんだと思った。

見る映像によって中国に対する思いが変わることが分かった。違った見方をすることも大切なんだと思った。

ただ簡単にニュースなどを受け入れるのではなく事実の中の真実をさらに自分で確かめることが大切であることが分かりました。

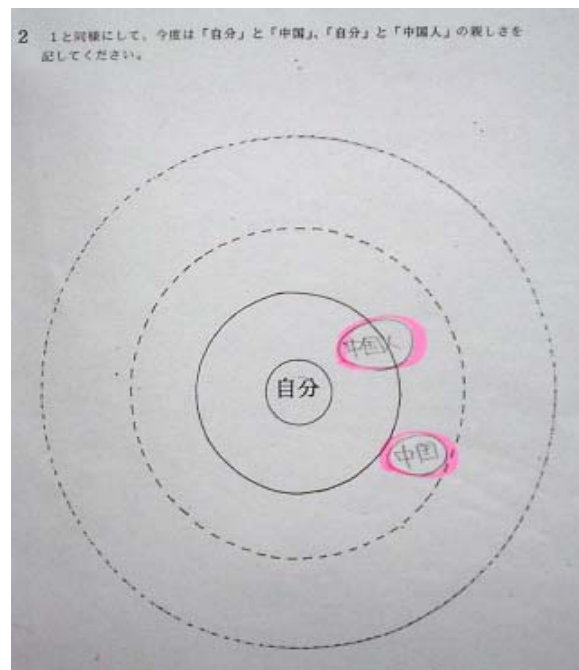


図1 国家・国民と自己の距離感

イ 結果と考察

検証方法として、授業後の感想から、他国へのとらえ方の変容を見る。また日本と他の国との距離を表す同心円のグラフを基に、授業の前後での変化を読み取る。また、個(自分)と該当の国との距離を表すことで、個人としての見方を数量化させ、比較する。

感想では資料1のように映像の力をとらえたものや、中国国民を「怖い」というとらえ方から、「全員がそうではない」と変容していく様子がみられた。これは二つの映像資料を比較することで「国」と「国民」を分ける視点がとらえられたと考えられる。その結果、授業後の自分と中国・中国人との距離を比較したところ、34人中14人が国家よりも内側に国民を記入していた。また、国家も国民も同じ距離であるが、自分に近い位置に記入した生徒も8名おり、国民と国家を分けてとらえ、嫌悪感より国民に対してはより親密感を抱いている様子が明らかとなった。

(2) 見通し1 他のクラスの実践より

ア 実践の概要

3年3組の様子から他のクラスでは、グループ分けをしないで実践を行った。前回と同じ映像資料を用いたが、順序を考え、ニュース映像の次にバラエティ番組を視聴した。また授業の始めに日本（国家）と中国（国家）との距離を記入させ、授業後の変化を見とれるようにした。

イ 結果と考察

映像の力をとらえる場面において「どちらの映像が真実であるか？」を強調することで、①ニュース映像が真実 ②バラエティ番組が真実 ③どちらも真実 ④どちらも真実でない の4つの視点に広がった。

②については希望的な感想ではあるが、「やらせじゃないか」の意見も強かった。これに対して、中国人留学生の投書記事をもとに「ニュースだって作られている」という発言を取り上げることで、映像の見方についての深まりが出てきた。

2種類の映像では同じ国民でありながらそこに表れるものが極端に違うため、生徒も単独で見るときとは違う受け止め方ができ、より効果があることが分かった。

また、視聴の順番を考えたことで、2回目以降の授業では、自分と中国人の距離を国家より近くに記入する生徒が34人中2人で1回目に比べ半減した。また、授業後ではほとんどの生徒が、日本と中国の距離を始めよりも近くに記入した。（最初から近い位置に記入した生徒も含めるとほぼ80%になった）生徒の感覚としても後半に「親日」の映像がある方が冷静に理解しやすいと考えられる。

(3) 流言(情報)や国籍に惑わされずに、人権・人命を尊重した個人の活躍を通して、真の国際人は何かについて、考えを深められたか。(見通し2)

○道徳 (1時間)

ア 実践の概要

関東大震災時に、流言により暴徒と化した民衆に対し、冷静な対応により韓国人の生命を守ろうとした大川常吉警察署長の行動を通して、国籍に関係なく人権・人命を尊重しようとする姿勢を育て、自らも含めた「国際人」について考えさせた。

書籍、テレビドラマとしても取り上げられた「杉原千畝」を話題として、外交官として国の命令に

背きながらも6000人のユダヤ人のためにビザを発行した行為について考えた。これに対し、インターネットで発見した「大川常吉」の認識を問うと、全員が知らないと答えた。日本人でありながら、朝鮮民族学校で教材として取り上げられる日本人の行為を紹介した。○語学力があったかは不明 ○無名の存在 ○日本にいた日本人 でありながら、その行為はデマゴグ（偽の情報）に惑わされることがなかった。「毒の入った井戸水をもってこい」といって暴動を収め、300人の朝鮮人を救った逸話から、他の国民に対する偏見や差別、デマゴグに対して冷静なとらえ方の重要性を指導した。授業後、再び「国際人」についての考えを記述させ、最初の記述との比較を個々で行った。

イ 結果と考察

検証方法としては、国際人についての記述を授業の前後で比較し、その変容をとらえる。

対象3年生1クラスと少人数クラスで実践した。最初に「国際人」のイメージを記述させた。ほぼ全員が①語学力 ②メディアが取り上げるスポーツ選手・芸能人 ③生活場所（日本に居る外国人、外国にいる日本人） ④職業 ⑤人種 のいずれかに分類できる反応を示した。

一部の生徒では、最初の意見をそのまま模倣したものも見受けられるが、語学力や職業にかかわらず、他の国の人々とどのように接して行くか、心情的な交流に視点を持って考えられていた。

(資料2)

最後の問いとして、「自分たちは国際人か？」に対して、悩みながら肯定と否定の意見が出された。肯定の根拠は「いくらかでも英語ができ、外国人と交流が可能」というものに対し、否定の方は「大川氏のような行動ができるか？」というものであり、否定派であっても国際人に対する理解の深まりが確かめられた。

授業後の「日本に住む日本人でも、他の国の人々が日本に多くいる現在では、皆これからの国際人」という言葉には、多くの生徒が納得の表情を見せていた。

これらの要因としては、外交官という国際社会との結びつきの強い職業の杉原千畝と、日本にいた日本人で、語学力があったとは思われない大川常吉を取り上げたことによって、生徒にとっては杉原千畝より、国際社会を身近に感じ取ることができたと考える。その結果、国内にいる自己にとっても国際人としての素養（この場合は語学力で

はなく人権尊重)が明確になったのだと考えられる。つまり迎え入れる国の国民として国際人であると理解できたといえる。

資料2

No	授業前	授業後
001	外国人	国や人種に関係なく、人を助けたいと思う人たち
002	黒人、白人、アメリカ人、ブラジル人、〇〇〇〇 (ALT)	他国の人々を理解でき、助け合ったり、救ったりでき、人々のことを思いやれる人
003	新渡戸稲造、外務大臣、総理、ブッシュ、ニカ国語以上話せる人、イチロー、松井 (大リーグ野球選手)	人種の差別をしないで、その人を一人の同じ人間としてみられる人物。国際的にみて誰もが素晴らしい人だと認めることができる人物
⋮	⋮	⋮

(4) 主要全国紙を通して、現代が抱えている国際社会上の共通課題について知り、これからの国際社会の課題に対して、一個人として取り組もうとする姿勢をはぐくめたか。(見通し3-1)

○総合的な学習の時間 (1時間)

ア 実践の概要

3種類の主要全国紙を1人1部ずつ用意し、国際欄を中心に、見出しを5つとそれにかかわっている国名を記録させた。見出しからは、伝えている内容の読み取りを進めた。主なものとしては・自爆テロ・鳥インフルエンザ・北朝鮮関連・仏での暴動などがあげられた。

その結果から、人種、宗教、経済格差、環境、といった地球規模的な課題があることを示し、これらが「共通課題」と呼ばれるものであることを押さえた。さらに記事を熟読し、「自分の考え」と「自分にできること」を考えさせた。(資料3)

資料3

特別授業 No3 今、世界が抱えている問題を知ろう!
3年2組 氏名

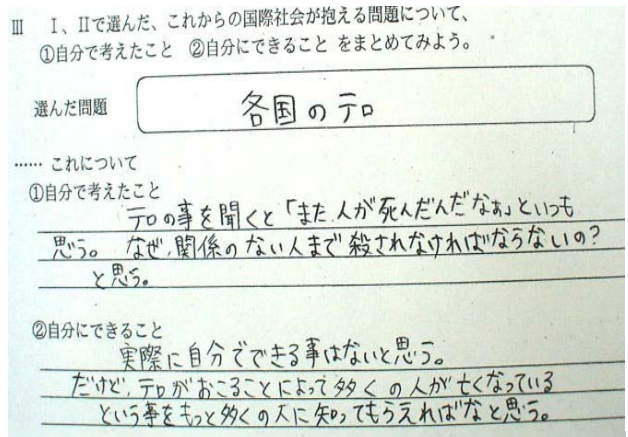
I ① 資料作り

新聞 記事の見出し (国際面をみてみよう)	関連する国
WTO交渉打開の議論	カナダ・ロシア アメリカ・韓国など
ヨルダン同時テロ 自爆未遂の女逮捕	ヨルダン
仏警官隊と衝突 若者51人逮捕	フランス
貿易投資自由化 目標達成へ行程表	韓国
パソコン米が入手	アメリカ

共通課題

最終的には、「共通課題があることを『知る』ということでも、よいのではないか」という意見で、生徒はまとめていた。(資料4)

資料4

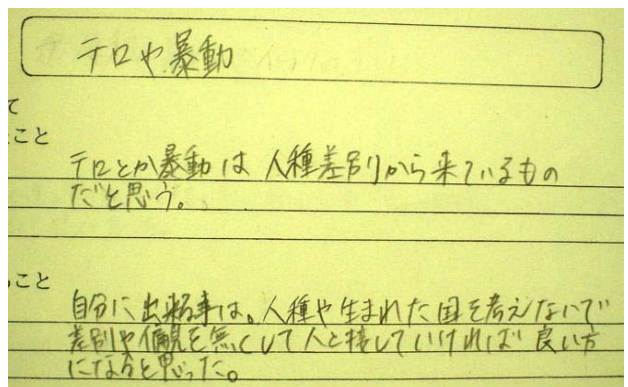


資料4 補正

選んだ課題 各国のテロ

① 自分で考えたこと
テロの事を聞くと「また、人が死んだんだなあ」といつも思う。なぜ、関係のない人まで殺されなければならないの?と思う。

② 自分にできること
実際に自分でできることはないと思う。
ただ、テロが起こることによって多くの人が亡くなっているという事をもっと多くの人に知ってもらえればなと思う。



イ 結果と考察

生徒は新聞のニュースを「出来事」としてとらえている傾向があり、報道されている背景には課題や日本との関連が存在しているという意識がない。そこで、国際欄を中心に見出しから記事に触れる体験をすることで、全世界で取り組む共通課題の存在を知ることができたと思う。

共通課題については大きな問題であるため、明確な解決方法は記述されず、希望的なものや非現

実的なものもあった。それでも、人種差別や環境保護につながる意見も記述され、関心を向けるようになったといえる。

(5) メディアリテラシーについてまとめられたか。

(見通し3-2)

○総合的な学習の時間 (0.5時間)

ア 実践の概要

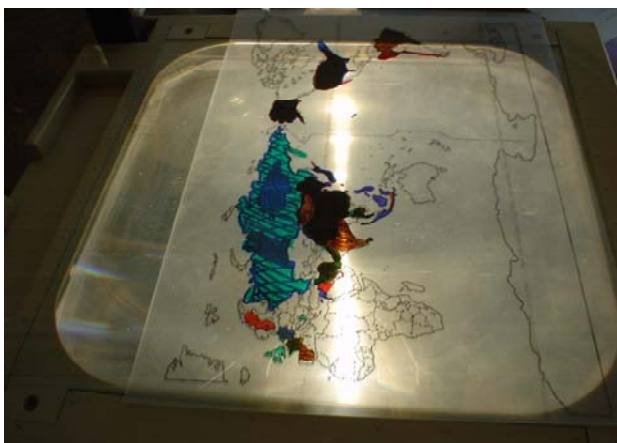
見通し3-1の時間に作った資料から、4~5人の班でTPシートの白地図(世界地図)に新聞記事に関連した国の場所を塗っていった。出来上がったTPシートを重ねてOHPで投影する事によって、重なりが濃くなっている国と、全く塗られない国があることに気づき、情報には偏りがあることを視覚によりとらえた。(資料5)

自国とのかかわりの深さによって情報にも格差があることを指摘し、アフリカ大陸、東欧、南米からの情報が少ないことが分かった。

テレビに限らず、新聞も含めたメディアからの情報も、紙面や時間の制約から取捨選択されていることに気付いた。

見通し1から3-2の授業を通し、国際社会とかわることは必然的に情報とのかかわりでもあることを伝え、メディアからの「情報」に視点をおき、これからの国際社会と情報に対する見方・考え方についての感想をまとめさせた。

資料5



イ 結果と考察

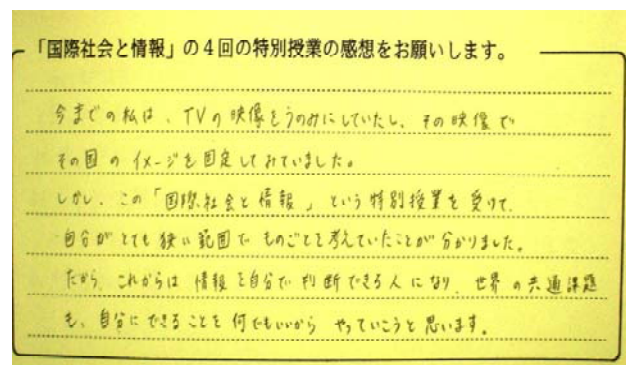
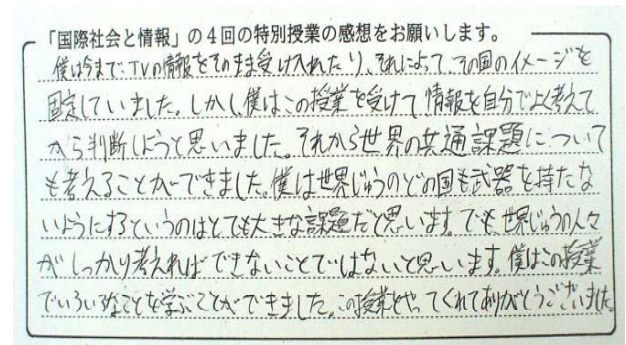
TPシートを重ねると、中国・ロシア・アメリカに比べてアフリカ大陸、東欧の空白が際立った。また、イラクや北朝鮮の重なりで国際情勢の不安さが表れていることを感じ取る生徒もいた。

「なぜアフリカからの情報がないのか。」については日本との交流の少なさが浮かび上がってき

た。「発展途上国の情報も流すべきだ。」や「貧困の様子などを放送すればもっといろいろな面で大切にしないでほしいのでは。」といった意見も出された。

このように情報量の格差が視覚的にとらえられたことにより、国際社会からの情報について、より広い視野でとらえ、自ら考えようとする姿勢がはぐくまれてきたと思われる。また、「国際社会と情報」のまとめの部分では、4回の授業のつながりを振り返ることで、一つ一つの授業のねらいに、より迫ることができた。(資料6)

資料6



資料6 補正

僕は今までTVの情報をそのまま受け入れたり、それによってその国のイメージを固定していました。しかし僕はこの授業を受けて、情報を自分でよく考えてから判断しようと思いました。それから世界の共通課題についても考えることができました。僕は世界じゅうのどの国も武器を持たないようにするというのはとても大きな課題だと思います。でも、世界じゅうの人々がしっかり考えればできないことはないと思います。

今までの私は、TVの映像をうのみにしていたし、その映像でその国のイメージを固定していました。しかし、この「国際社会と情報」という特別授業を受けて自分がとても狭い範囲にものごとを考えていたことが分かりました。だから、これからは情報を自分で判断できる人になり、世界の共通課題も、自分にできることから何でも

いいからやっていこうと思います。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

国際理解教育は、異文化理解の側面が主となり、「違い」の部分のみが強調される傾向がある。これに対し本研究ではメディアからの情報というものから異文化をとらえる際の姿勢をどう指導するかを中心に構成し、国際人としての在り方を考えてきた。

- メディアを複数活用することで、一つの事象を多方面からとらえ、考えようとする姿勢が身に付き、与えられた情報をそのまま受け入れず、自分でより深く考えようとする姿勢につながった。
- 誤った情報が人権を侵害し、差別を助長する事実を知ること、これからの国際社会における見方・考え方や公正・冷静な判断力の必要性をとらえることができた。
- 共通課題について考えることによって、国際社会にかかわっている自分の存在を知り、国際社会に臨む姿勢が身に付いてきた。また、情報を補うため、自身の視野を広げる大切さも理解できた。
- 情報を軸に構成した国際理解教育全体を通して、「どこに真実があるか」を、生徒自身が考え模索することで、より深い人間理解の視点ももてるようになった。

つまり国際理解を通して世界が抱えている共通課題を知ることや、国籍に関係なく人間に対する優しさや思いやりをもつことが、広く人類愛につながっていくと考える。今後も国籍による差別や迫害などを敏感に感じ取れる感覚や、情報を自分で判断する力も含め、たとえ国家間に課題はあっても、個人として相手を尊重できる人間性をはぐくみたい。そのための人間形成の場となるよう、国際理解教育を位置付けたい。

2 今後の課題

情報によって国際社会と自己との結び付きを認識し、情報に対する姿勢をはぐくむ実践を進めてきた。そのため「人権」や「情報の格差」については、どの程度まで深めて行くか、予想がつかない点があり、徐々に学習の内容が広がりを見せた。今後は広がった内容に対して、各教科・道徳と関

連付けることで、より深く理解ができると考える。

学年の中に、メディアに取り上げられた国の生徒がいなかったが、題材として取り上げる国については十分な配慮を要する。

今回の実践では主に、テレビと新聞の2つのメディアを中心に進めてきた。今後新しいメディアが登場することも考えられるが、新しいメディアにその都度対処するのではなく、「情報」に対して冷静な判断がとれる姿勢を、国際理解に限らず様々な場面で指導していく必要を感じた。

<参考文献>

- ・佐藤 郡衛・林 英和 編 『国際理解教育の授業づくり』 教育出版（1998）
- ・大阪市小学校国際理解教育研究会 編 『国際理解教育と人権』 解放出版社（2003）
- ・徳山 喜雄 編 『報道不信の構造』 岩波書店（2005）



(担当指導主事 萩原 勝義)

